# THEATER COMMONS TOKYO

# THEATER COMMONS TOKYO

シアターコモンズ’20

Sankar Venkateswaran
Silke Huysmans & Hannes Dereere
Meiro Koizumi
Nahum
Kyun-Chome
Satoko Ichihara
Daichi Nakamura
J Art Call Center

# 開催概要

## 都市にあらたな「コモンズ＝共有地」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。演劇公演、レクチャーパフォーマンス、ワークショップ、対話型イベントなどを港区内で開催！

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なものや複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

第4回目となる今回は、これまで人類が発明してきた新旧様々なテクノロジーを介在させた演劇作品やパフォーマンス、ワークショップ、対話型イベントなどを、11日間にわたり港区内で集中的に開催します。

シアターコモンズは、港区内に拠点をもつ国際文化機関、台湾文化センター、ゲーテ・インスティトゥート東京、アンスティチュ・フランセ日本、オランダ王国大使館とNPO法人芸術公社が実行委員会を形成し、「港区文化プログラム連携事業」として港区内を中心に展開します。

シアターコモンズ '20

**会期**
2020年2月27日［木］- 3月8日［日］

**会場**
東京都港区エリア各所

**主催**
シアターコモンズ実行委員会
台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター
ゲーテ・インスティトゥート東京
在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本
オランダ王国大使館
特定非営利活動法人 芸術公社

**共催**
港区 令和元年度港区文化プログラム連携事業
慶應義塾大学アート・センター

**パートナー**
SHIBAURA HOUSE

**助成**
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京



# ABOUT

## A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. Expect theater, lecture performances, workshops and dialogues, held across Minato ward!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater. By using theater — that is, by applying theatrical ideas — in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery.

For this fourth edition, we organize a 11-day intensive that includes theatrical pieces involving various invented technologies of the old and the new, performances, workshops, and discussions.

Theater Commons Tokyo is held in venues across Minato ward as part of Minato City FY2019 Minato Cooperation Project for Cultural Program. The executive committee is composed of Arts Commons Tokyo and the following international cultural institutions based in the ward: Taiwan Cultural Center (Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan), Goethe-Institut Tokyo, Institut français du Japon, and Embassy of the Kingdom of the Netherlands.

Theater Commons Tokyo '20

**Date**
February 27th-March 8th, 2020

**Venue**
Various places
in Minato ward, Tokyo

**Organized by**
Theater Commons Tokyo Executive Committee
Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan
Goethe-Institut Tokyo
Embassy of France in Japan / Institut français du Japon
Embassy of the Kingdom of the Netherlands
Arts Commons Tokyo

**Co-organized by**
Minato City FY2019 Minato Cooperation Project for Cultural Program
Keio University Art Center

**In partnership with**
SHIBAURA HOUSE

**Supported by**
Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

# ディレクター・メッセージ

## 聞くことのポリティクス―分断と不和を乗り越えるために

相馬千秋（シアターコモンズ ディレクター）

*「立ち止まってくれ。ちょっと話そう。わたしたちは21世紀を迎え、同じ方向に逃げる群れとなった。」*

松原俊太郎の戯曲『正面に気をつけろ』は突然、こう始まる。語るのは「群衆人間」と名付けられた謎の登場人物だ。群衆人間は一本道をひたすら正面に進んでいく。迂回路もなく、後戻りもできない。「わたしたち」の属する国家や共同体が経験した様々な危機や失敗の記憶が波のように押し寄せて、死者たちを饒舌にさせる。だが今、私たちはこう言うべきかもしれない。「立ち止まってくれ。ちょっと話を聞こう」、と。

メディアテクノロジーの発達により、誰もが主体的に「語る」ことが容易な時代を迎えて久しい。スマートフォンさえあれば、幼い子供でも世界的なユーチューバーになれるし、戦時下でも詩を詠めば瞬時に世界中に発信することができる。だが、誰もが表現者になれる時代は、誰もがその表現を凌駕する大声で妨害できる時代をも意味する。他人の表現を一部だけで判断したり、一方的に断罪したり、暴力的な攻撃さえ加えられる――、そのような事態が今、「表現」を脅かし、語る主体を萎縮させようとしている。

先のあいちトリエンナーレ2019に端を発した一連の出来事は、（私自身がキュレーターという当事者だったことを差し引いたとしても）今日の日本で表現活動に関わる者にとって、あまりに大きな衝撃をもたらした。この短い文章でその複雑な一部始終を解説することは避けるが、一言で言うならば、これまでも既に社会のあちこちに堆積していた様々なレベルの不寛容と、それが生み出す分断や抑圧がいっきに可視化された事件だった。その影響は、これまでアートとは無縁だったと自認する不特定多数の怒れる市民から、日本の文化政策の中枢たる文化庁にまで及び、議論は幾多のメディアを通じてさらに増幅され、政治家たちの介入により国会や裁判所にも飛散した。その事態は未だに収束しないどころか、この国の芸術文化政策の根幹や国際的信用をも揺るがし、危機感は強まる一方だ。半年後にオリンピックという国家主導の祝祭を控えた今、自主規制は人々の内面に深く作用し、表現の萎縮がさらに進行するのか。私たちは、「あいち以後、オリンピック前」という極めて特異な時間の中で、どこに向かうべきか、どうすればこの危機を脱することができるのかわからずにいる。言わば宙づりの状態だ。

それゆえ、私たちは自らにこう語りかけてみてはどうか。「立ち止まってくれ。ちょっと話を聞こう」、と。演劇は、もともと人の話を聞くための装置でもあったはずだ。演劇はその起源において、神々や英雄の声、死者の声、敗者の声、あるいは人間ではない畏怖の存在の声を聞くメディアであった。今、私たちが聞こうとしても聞くことができない声はどんな声か。あるいは、聞きたくないとつい耳を塞いでしまう声はどんな声か。自分の話をする前に、他人の話を聞く。21世紀も20年が過ぎた今なお、人の話を一切聞かずに自分の主張ばかりする者たちが分断を煽るのであれば、私たちはまず人の話を聞き、「わかり合えないもの」同士が互いを聞き合う回路を発明することによって、分断を乗り越えていくしかないのではないか。そもそも「わかり合えないもの」同士が共存する社会を前提にしたとき、目の前の敵対と不和の内なる正体は何か。芸術、そして演劇が、この問いに向き合うことなく、自らの表現の自由を無条件に主張することは難しい時代に突入したのだ。

今回のシアターコモンズは、「あいち以後、オリンピック前」という特異な時期の開催となり、不可避的に、当初から予定されていた演目に加え、あいち後に急遽追加した企画が混在する形となった。だが、その両方を貫く軸はシンプルだ。人の話を聞く。自分の近くで、あるいは遠くで日々生成される声を、個人で、そして集団で聞く。身体とともに聞く。自分の声も聞く／話す。そのとき、お前の話は聞きたくないと拒絶されることもあるだろう。だが、その「非聴」の状況を逆手にとり、聞こえない声同士を出会わせる新たな回路を発明しなければならない。それこそが、今、演劇というツールを使って試みなければならない、古くて新しい挑戦なのだ。

私たち人間の身体やその知覚や感覚、感情は今、新旧さまざまなテクノロジーの介在によって、どのような状況に置かれているのか。今回のシアターコモンズでは当初の計画を踏まえ、テクノロジーと人間の緊張関係や共犯関係から、この問いについて考察する一連の作品を上演する。小泉明郎による『縛られたプロメテウス』は、VR技術を使った本格的な演劇作品だが、体験者は身体の拡張と有限性に引き裂かれるような逆説を経験することになるだろう。インドから再び参加するシャンカル・ヴァンカテーシュワランによる最新作『インディアン・ロープ・トリック』は、前近代の魔術的なトリックが、近代においても人々の幻想や欲望と結びつき、ある共同体の神話を強化してきた構造自体を暴き出す。また今回初登場となるナフームは、人間の精神へのアプローチとしてヒプノシス（催眠術）を用いる。そして、他者の感情や身体を催眠によって操作するという危険な一線を敢えて越えることで、人々がまだ見ぬ宇宙空間と内的空間の接続を試みる。催眠術も、VRも、魔術的トリックも、人間の知覚を騙し、見えないものを見せる技術であるという共通点をもつが、現代のアーティストはその仕掛けに対してどんな批評的な視座を持ち込むのだろうか。

またドキュメンタリー演劇のあらたな旗手、ジルケ・ユイスマンス＆ハネケ・デレーレは、スマートフォン操作で買い物も犯罪も遂行可能という、私たち人類の身体が置かれた状況を舞台上に出現させる。そして彼ら自身もまた、救いようのない他者の現実を、指先の操作一つで舞台上に「悲劇」として出現させてしまう。誰もがあまりに容易に「悪」に加担してしまう世界の中で、彼らは舞台上で「一言も発さない」という選択をとる。果たしてその態度は、これからの演劇をどのような方向に導くのか。これら4つの作品上演後、3月7日に行われるコモンズ・フォーラム「芸術と仮想性」は、生身の身体性を担保にしてきた演劇が、来たるべき仮想現実技術によってどのような未来に向かうのか、考察を深めたい。

今の東京で有効な言葉は何か。この問いから選ばれた戯曲を、その場に集まる観客自身が、集団で、声に出して読む。今回2回目となるリーディング・パフォーマンスでは、二人の演出家とともに戯曲を選定した。市原佐都子は、1世紀以上にわたり「日本人女性」のイメージを流布し続けるオペラ『蝶々夫人』のセリフを、わざわざ日本語で集団朗読するという倒錯的アプローチを通じて、西洋と東洋、男性と女性の間の、圧倒的に非対称な欲望を裏返し、笑い飛ばす。中村大地は、松原俊太郎の近作『正面に気をつけろ』で、この戯曲が放つ巨大なエネルギーを、同時代に生きる観客との発話を通じて集団的経験へと再編成する。過去と未来、あの世とこの世の狭間の一本道で、亡霊のように繰り返し立ち現れる戦争や震災、民主主義の挫折という大きな物語／歴史。この言葉を注入され続ける「わたしたち」の身体と脳は、どんな衝撃と変容を体感するのだろうか。

これらの上演と並行して、あいち後に噴出した諸問題を巡る対話と考察の場も創出したい。劇的な形で分断と不和が可視化された今日の社会において、私たちはどこへ向かうのか。この火急の問いへの応答として、4回にわたりコモンズ・フォーラムを集中的に開催する。「芸術と社会」「芸術と公共」「芸術と仮想性」「芸術と政治」という4つのテーマ設定のもと、国内外から総勢

20名を超える論客を招き、観客同士の対話も含め、合計10時間を超える議論を行う。歴史と未来をつなぎ、理論と実践を行き来しながら、社会の分断を乗り越える芸術の可能性を探る対話によって、人の話を聞き、集団で思考するミクロな公共圏が立ち現れるはずだ。

また、一連の騒動の教訓を未来の文化事業運営の共有知として活用すべく、アートプロジェクトにおける危機管理ワークショップを企画する。（私自身も含む）芸術祭事務局が2ヶ月半にわたり経験した非常事態での危機管理や対応策、またJアートコールセンターの一員として受けた電話の向こう側に関する考察。これらを他の当事者や専門家を交えて共有し、今後の文化事業でも実効性あるプログラムとして開発・提供したい。ここに集う参加者もそれぞれの経験や知見を持ち寄り、相互に学び合うことで、危機管理に関する共有知の領域を拡大することができるはずだ。

もう一つのワークショップを企画するキュンチョメは今回、人々が自分の「いちばんやわらかい場所」を暴き出すための儀式的な試みを提案する。個人および集団でのアクションを通じて、各自の無意識や記憶に深く潜り込み、それぞれが信じるものの手触りとその由来を語り合う。「人の話を聞くこと」によって自らを更新し生成する循環に期待したい。

正直に言えば、私はまだ混乱しているのだ。あまりに大きな課題が目の前にあり、その手のつけられなさに焦り、不安を感じ、心底憂鬱な気持ちになる。と同時に、やがてはこの非常事態にも慣れ、そういうものとして折り合いをつけていこうとする空気が社会を覆う速度にも恐れを感じる。この感覚は、9年前の震災直後を想起させる。私は当時ディレクターを務めていた芸術祭のテーマを「私たちは何を語ることができるのか」と設定したが、もう一つのカタストロフを経験した私は今、むしろこう言うほうにリアリティを感じる。「私たちは何を聞くことができるのか」と。そこで私たちは立ち止まり、考え、他人の話を聞くことによって、芸術という営みが今日の社会で存立する意味と条件を再構築し、その価値観を必ずしも共有しない人たちとの対話を重ねることを諦めてはならない。今回のシアターコモンズは、「あいち以後、オリンピック前」の宙づりの時間の中で、未済の混沌を受け入れながら立ち止まるための、火急の共有地としての役割を果たすだろう。ぜひその場に集まって、皆さんの知恵や好奇心、戸惑い、怒り、そして希望を共有していただきたい。

**プロフィール**

相馬千秋（そうま・ちあき）｜NPO法人芸術公社 代表理事／アートプロデューサー。「フェスティバル/トーキョー」初代プログラム・ディレクター（F/T09春〜F/T13）、文化庁文化審議会文化政策部会委員（2012-15）等。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。2016年より立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授。2017年より「シアターコモンズ」実行委員長兼ディレクター。「あいちトリエンナーレ2019」のキュレーター（舞台芸術）も務めた。



# DIRECTOR'S NOTE

## The Politics of Listening—Overcoming Division and Discord

Chiaki Soma (Theater Commons Tokyo Director)

"Stop. Let's talk for a second. We've entered the 21st century, and we've turned into a mob all fleeing in one direction."

This is how Shuntaro Matsubara's play *Keep Your Front Up* abruptly opens. The words are uttered by a mysterious character called the "man from the crowd" who simply walks forward on a single continuous road. There is no detour, no return. Waves of memories flood in, reflecting various crises and failures experienced by "our" state and collective, prompting the dead to be garrulous. But perhaps now is the time to say: "Stop. Let's talk for a second."

For some time now we have been in an era of technological development that allows anyone to easily tell their own story. With just a smartphone, a toddler can become an international YouTuber, or a civilian living amidst war can instantly share their poetry online. It is an era that encourages anyone to express themselves, which also means an era where anyone can overwhelm others' expressions with their loudness. The situation we face now—with works judged without full context, one-sided condemnations, and even violent attacks—threatens our "expression" with attempts to diminish those who speak.

The series of events stemming from Aichi Triennale 2019 caused an unimaginable shockwave among cultural workers in Japan (my involvement as a curator notwithstanding). I will avoid describing the full and complicated account in this short text. Simply put, the incident directly brought to light the division and discord created by the varying levels of intolerance already accumulating all over society. Its repercussions spread among many angry civilians who previously did not see themselves as privy to art, as well as the Agency for Cultural Affairs, the center of Japan's cultural policy. Discussions intensified across many media platforms and the matter even reached legal courts and the National Diet, due to the involvement of politicians.
Far from running its course, the situation has destabilized the core of Japan's arts and culture policies and damaged its international credibility, deepening a sense of crisis. Six months away from the state-led festival of the Olympics, will we further internalize this attitude of self-censorship and continue to reduce our range of expression? We stand in an extremely particular time frame, post-Aichi and pre-Olympics, unable to set off on the next direction or strategy to evade crisis. In other words, we are in a state of limbo.

Given these circumstances, what if we each said to ourselves: "Stop. Let's talk for a second." Theater originated as a way of listening to people's stories. It once served as a medium to listen to the voices of the gods, heroes, the dead, defeated, or otherworldly existences held in awe. What voices do we try yet fail to listen to today? What voices do we resist tuning in? Listening to the stories of others before talking about ourselves: if we assume that now, twenty years into the twenty-first century, divisions are created by those who refuse to listen and only care to make claims, perhaps the only way for us to move forward is by first listening to others, creating pathways for those who remain in mutual incomprehension to listen to each other. If we begin from the assumption that society is made up of people that refuse to understand each other, what are the true identities hiding behind their external hostility and discord? We have entered an era in which the arts and theater can no longer unconditionally claim freedom of expression without confronting these questions.

With this year's Theater Commons Tokyo falling post-Aichi and pre-Olympics, we inevitably decided to add some programs to the original

schedule. The core aim we pursue with both programs remains simple: to listen to the stories of others. It is to listen, as individuals and collectives, to the proximate and distant voices uttered in everyday life. It is to listen with our bodies and to listen to and speak with our voices. At times others may refuse to listen to our stories. We must take this "non-listening" as an opportunity to create new pathways to bring together voices that do not hear each other. It is an old and new challenge that we must now face, using theater as our tool.

With the development of many old and new technologies, what situation do our bodies' perception, sensation, and emotion now experience? Based on our original TCT'20 program, we present a series of works that consider tension and complicity in the relationship between humans and technology. In Meiro Koizumi's *Prometheus Bound*, a full-fledged theater piece using VR technology, the audience undergoes the paradoxical experience of being torn between their bodies' expansions and limitations. In returning artist Sankar Venkateswaran's latest work *Indian Rope Trick*, the structure is exposed of a pre-modern magic trick that continues to capture the modern imagination and desires, strengthening a collective myth. Nahum, who joins us for the first time, uses hypnosis to approach the human psyche. By crossing the risky line of controlling other people's bodies and emotions, he tries to connect the once unseen outer space to our interior spaces. Hypnosis, VR, and magic tricks are all techniques that deceive human perception to show what we cannot see. What critical perspective will these contemporary artists bring to each device?

New innovators of documentary theater Silke Huysmans and Hannes Dereere present the physical condition humans face today, whereby anything from shopping to committing a crime is made possible through smartphones. Using only finger movements, they show the hopeless reality of others as a tragedy. In a world where anyone can become complicit in acts of evil, they choose to not utter a single word. How will this position influence and reflect upon the world of theater moving forward? On March 7 in the post-performance Commons Forum "Arts and Virtuality," we aspire to deepen our concern for the future of the theater, which has historically relied on physical human form, within the imminent technological context.

What words resonate in today's Tokyo? Guided by this question, the audience reads plays out loud as a group. For our second annual reading performance, we selected plays with the help of two directors. Satoko Ichihara chose to read the dialogue of *Madama Butterfly* as a group reading performed in Japanese. It is an opera that for over a century has disseminated the image of the "Japanese woman." Through this perverse approach, she inverts and laughs off the extremely asymmetrical desires of the East and West, and women and men. Daichi Nakamura selects Shuntaro Matsubara's latest work *Keep Your Front Up*, and redirects the enormous power emitted by the play through the voices of a contemporary audience and toward a collective experience. Here we find a grand narrative/history of wars and earthquakes, the setbacks of democracy—haunting us like ghosts along this road that lies in the gap between past and present, this world and the next. What kind of shock and transformation will "our" minds and bodies undergo when continually infused with these words?

Alongside these performances, we would like to provide a space to consider and discuss the numerous issues that erupted after Aichi. In today's society, where division and discord emerge dressed in theatrical trappings, what direction do we take? In response to this urgent question, we host four sessions of intensive Commons Forums totaling more than 10 hours. Under the themes of "Arts and Society," "Arts and Public," "Arts and Virtuality," and "Arts and Politics," we welcome over 20 panelists from home and abroad for panels and audience discussions. Weaving together history and future as well as theory and practice, we strive, through conversations exploring the possibility of the arts in overcoming social divisions, to manifest a micro public sphere that thinks and listens collectively.

We also provide a workshop for crisis management in social practice art projects to utilize the lessons learned from this series of events as shared knowledge for future cultural projects operations. Based on our two-and-a-half months long experience, the festival office staff and I will give our observations on emergency crisis management, solutions, and those who called into the J Art Call Center. Participants are also welcome to share their experiences and knowledge, mutually educating one another to expand the depth and breadth of our common understanding of the topics.

For another workshop, Kyun-Chome presents a ritualistic experiment to reveal our "softest places." Through individual and collective acts, the duo delves deep into each participant's memories or unconscious mind to facilitate a discussion on the textures and origins of their beliefs. We hope this opportunity contributes to a generative cycle of updating ourselves through listening to the stories of others.

Frankly, I remain confused. I feel nervous and quite disheartened, unsure of where to start in facing such an enormous challenge. I also fear that society has been pervaded by attempts to rapidly adapt to and accommodate this crisis. This feeling reminds me of the atmosphere nine years ago, right after the tsunami and earthquake of March 2011. At the time, I chose "What can we say?" as the theme for the arts festival I directed. After experiencing another catastrophe, it now feels more realistic to ask instead, "What can we hear?" We must stop, think, and listen to the stories of others if we are to reconstruct the meaning and conditions of the arts in today's society; we must continue our conversations with people who may not always share our values. In this limbo timeframe of post-Aichi and pre-Olympics, we would like this year's Theater Commons Tokyo to serve as a necessary common ground to take in this unresolved chaos for a moment. We would be grateful to have you join us and share your knowledge, curiosity, confusion, anger, and hope.

**Profile**

Chiaki Soma | Representative Director of NPO Arts Commons Tokyo, Art producer. Chiaki was the first Program Director of Festival/Tokyo, Japan's leading performing arts festival, from 2009-2013, as well as the first Director of Steep Slope Studio in Yokohama from 2006-2010. She served on the Agency for Cultural Affairs' Culture Council Cultural Policy Subcommittee from 2012-2015. In 2015, she received the Chevalier de L'Ordre des Arts et des Lettres. Since 2016, she has been a Specially Appointed Associate Professor, College of Contemporary Psychology, Body Expression and Cinematic Arts, Graduate School of Contemporary Psychology of Rikkyo University, Tokyo; since 2017, she has served as the chairperson of the Theater Commons Tokyo Executive Committee, as well as its director. She is also involved in theatrical curation for the 2019 edition of the Aichi Triennale.

# 目次

# CONTENTS

## シアターコモンズ ’20

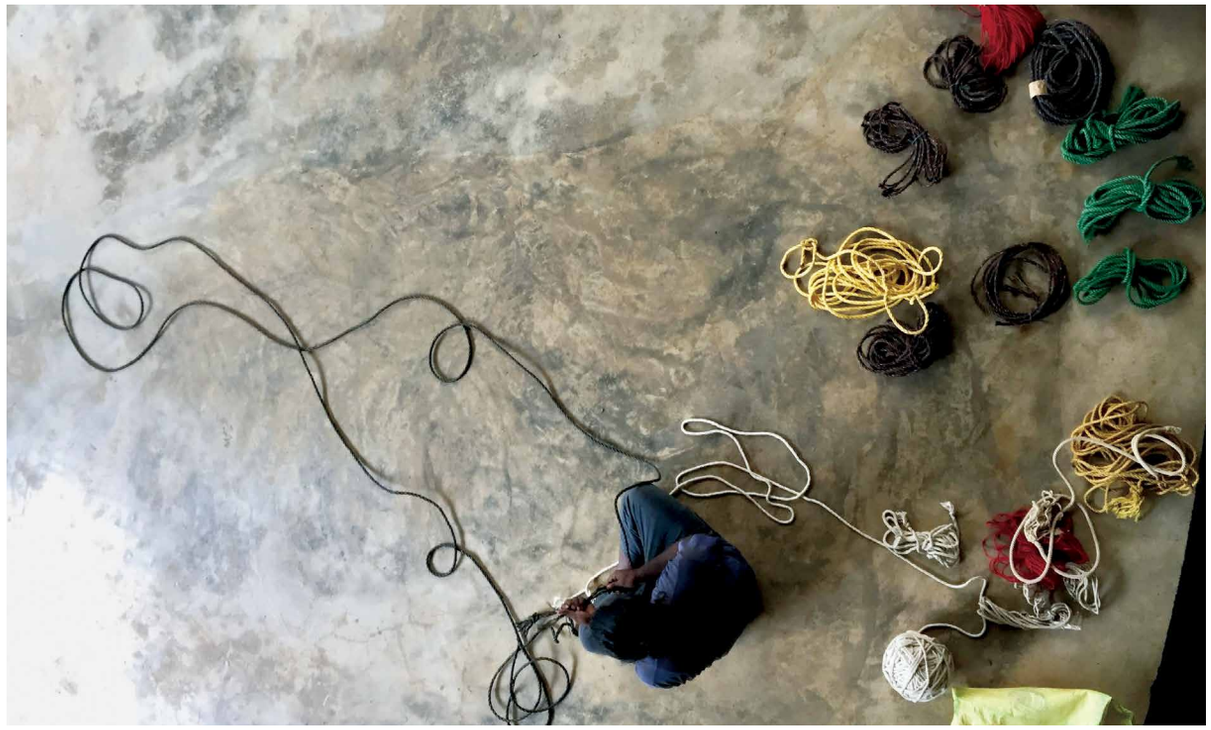
## Theater Commons Tokyo ’20

page


02　開催概要
04　ディレクター・メッセージ
10　目次
11　プログラム
41　会場
42　スケジュール
44　クレジット


page


02　About
04　Director’s note
10　Contents
11　Program
41　Venues
42　Schedule
44　Credits



演劇公演
Theater

# シャンカル・ヴェンカテーシュワラン［インド］
## Sankar Venkateswaran [India]

–

# インディアン・ロープ・トリック
## Indian Rope Trick

**日時**
2月27日［木］19:00
2月28日［金］19:00

**Dates**
February 27th [Thu] / 19:00
February 28th [Fri] / 19:00

**上演時間**
約70分

**Performance times**
approx. 70 min.

**会場**
リーブラホール
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

**Venue**
Libra Hall
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

**参加方法**
要予約・コモンズパス提示

**How to Participate**
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

**上演言語**
英語・カンナダ語（日本語字幕つき）

**Language**
English and Kannada (with Japanese subtitles)

## なぜ、私たちは見ているつもりの「真実」を見逃すのか。現代社会に複雑に張り巡らされた「トリック」の構造に迫る最新作。

**Why do we overlook the “truths” that we think we see?
Sankar Venkateswaran’s latest work focuses on the mechanics of the “trick” woven into contemporary society.**

昨年のシアターコモンズ’19で『犯罪部族法』を上演し、社会や個人の無意識に潜む差別の構造に鋭く迫ったシャンカル・ヴェンカテーシュワラン。今回、再び京都造形芸術大学舞台芸術研究センターとシアターコモンズとの共同製作に取り組み、人々の幻想を掻き立て続けてきた伝説「インディアン・ロープ・トリック」をモチーフにした最新作を上演する。

多数の民族や階層が混在する社会では、多数派の支配のツールとして神話や物語が書かれ、それらは繰り返し語られるうちに、共通の「真実」となってゆく。私たちがいつの間にか受け入れている「真実」――ごまかし、プロパガンダ、フェイク・ニュース、人々がすすんでそれらを信じようとすることを基盤に、社会構造は築き上げられてきた。その国家主義的、民族主義的アイデンティティの構築に疑問を投げかけ、真実を見透かそうとするシャンカルの視線の先に、観客は自らの内側にまで深く入り込んだ魔術の影を見出すかもしれない。

Indian director Sankar Venkateswaran presented *Criminal Tribes Act* at last year’s TCT’19, cutting through the discriminatory structures lurking within individual and social unconscious. Through another co-production this year with Theater Commons Tokyo and Kyoto University of Art and Design’s Kyoto Performing Arts Center, Venkateswaran presents his latest work based on the Indian rope trick, a legend that has continued to capture people’s imaginations.

In societies where different ethnic and class groups coexist, majority forces use myths and narratives as tools of domination. When these stories are told repeatedly, they can become commonly held “truths.” We see ourselves accepting these narratives, including deception, propaganda, and fake news. The reality that people willingly believe stories as facts serves as a basis for building social structures. Led by Venkateswaran’s perspective that questions the construction of nationalist and ethnic-nationalist identities, the audience may encounter mystical shadows nestled deep within their interiority.

「インディアン・ロープ・トリック」とは……
奇術師は弟子の少年を連れて、人々の集まる広場に現れる。奇術師が魔法をかける行為をすると、ロープが空高く登っていく。少年はロープを登って行き、姿が見えなくなるが、いつまでたっても戻ってこない。その後、奇術師もロープを登って後を追い、姿を消す。突然、少年の悲鳴が聞こえ、バラバラになった少年の体が空から降ってくる。奇術師がロープを降り、バラバラの体に魔法をかけると、少年は元通り復活する。これは14世紀のモロッコ人による旅行記を始め、いくつかの文献に記載されており、19世紀には多くのインドのマジシャンがこのトリックに挑んだ。なお、この物語には様々なバリエーションが存在する。

What is the Indian rope trick?
A magician brings a boy assistant to a square where people gather. As the magician performs his trick, the rope rises high into the sky. The boy climbs up the rope and disappears, seemingly forever. Then the magician follows suit, climbing up the rope and vanishing. The audience suddenly hears the boy scream, then watch his fragmented body parts fall from the sky. The magician climbs back down the rope. He casts a spell onto the body parts that revive the boy uninjured. The trick is recorded in several documents including a travel account by a fourteenth century Moroccan explorer. Various versions of this story exist. Many Indian magicians attempted to perform it in the nineteenth century.

**クレジット**
演出｜シャンカル・ヴェンカテーシュワラン
出演｜チャンドラ・ニーナサム、アニルドゥ・ナーヤル、サンジュクタ・ワーグ
音楽｜スニール・クマール・PK
舞台美術｜ジャン=ギ・ルカ
プロデューサー・日本語字幕｜鶴留聡子
製作｜シャンカル・ヴェンカテーシュワラン、京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター、シアターコモンズ
–
通訳｜田村かのこ（Art Translators Collective）

**Credit**
Concept and Direction｜Sankar Venkateswaran
Performers｜Chandra Ninasam, Anirudh Nair, Sanjukta Wagh
Music｜Sunilkumar P. K.
Scenography｜Jean-Guy Lecat
Producer, Japanese subtitles｜Satoko Tsurudome
Production｜Sankar Venkateswaran, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design, Theater Commons Tokyo
–
Interpreter｜Kanoko Tamura (Art Translators Collective)

**プロフィール**
シャンカル・ヴェンカテーシュワラン｜1979年インド・ケーララ州カリカット生まれ。インド国内およびシンガポールの演劇学校で研鑽を積み、2013年ノルウェーの国際イプセン奨学金受賞。国内外で演出活動の傍ら、インド国内外の劇団や演劇学校にて、独自の俳優トレーニング法を取り入れたワークショップを開催。2015-16年にはケーララ州国際演劇祭の芸術監督を務めた。2016年にはKYOTO EXPERIMENT京都国際舞台芸術祭にて太田省吾の代表的戯曲『水の駅』を演出し話題を集める。2019年1月には『犯罪部族法』を京都芸術劇場studio21およびシアターコモンズ’19にて上演した。現在、ケーララ州の山中に独自の劇場を建設しながら、インドと世界の演劇界をつなぐ活動を展開している。

**Profile**
Sankar Venkateswaran｜Born in Calicut, Kerala in 1979, Sankar Venkateswaran studied directing at the School of Drama and Fine Arts, University of Calicut, after which he trained at the Theatre Training and Research Programme, Singapore. In 2013 he received the Ibsen Scholarship from Teater Ibsen, Norway, which furthered his work with the indigenous people in Attappadi, Kerala. His following works, including *Criminal Tribes Act* which premiered at Zurich Theater Spektakel in 2017, reflect the shift in his working context. In 2015 and 2016, Venkateswaran served as the artistic director for the International Theatre Festival of Kerala. During his term, the program emphasized South-South exchanges to resist the Eurocentric agendas of cultural practice. He gained attention in Japan with his production of Shogo Ota’s *The Water Station* at Kyoto Experiment 2016 autumn. Currently he lives and works out of the theatre he built in Attappadi.

©Gabriela Neeb

©Bea Borgers

演劇公演

Theater

# ジルケ・ユイスマンス&ハネス・デレーレ［ベルギー］

# Silke Huysmans & Hannes Dereere [Belgium]

–

# 快適な島

## Pleasant Island

**日時**

3月5日［木］19:00

＊終演後、ポストトーク有、司会｜岩城京子（演劇パフォーマンス学研究者、アントワープ大学専任講師）

3月6日［金］19:00

**Dates**

March 5th [Thu] / 19:00

*Talk (after the performance), Moderator | Kyoko Iwaki (Theatre and Performance Lecturer at University of Antwerp)

March 6th [Fri] / 19:00

**上演時間**

約70分

**Performance times**

approx. 70 min.

**会場**

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

**Venue**

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

**参加方法**

要予約・コモンズパス提示

**How to Participate**

Booking essential.
Show general admission pass on entry.

**上演言語**

英語（日本語字幕つき）

**Language**

English (with Japanese subtitles)

## 資本主義の搾取の末に使い果たされた「快適な島」の未来―。スマートフォン操作だけで上演される、新世代のドキュメンタリー演劇。

**Depleted of its resources through endless capitalist exploitation, what future awaits the "Pleasant Island"? Silke Huysmans and Hannes Dereere present a new form of documentary theater performed entirely through a smartphone.**

あらたなドキュメンタリー演劇の旗手として注目を集める若手アーティストユニット、ジルケ・ユイスマンスとハネス・デレーレ。舞台上で一言も発せず、彼らがiPhoneを操作するだけで浮かび上がらせるのは、太平洋の小島国家、ナウルの現実だ。かつて、リン鉱石開発で「世界でもっとも豊かな国」と言われたこの島国は、すべての天然資源が枯渇するまで掘り尽くされた末に経済破綻し、現在は多額の補償金と引き換えに、オーストラリアから難民を受け入れる収容所となっている。

生態学的、経済的、人道的に使い果たされた「快適な島」は、地球全体の遠くない未来を暗示するかのようだ。指先の操作だけで舞台上に他者・他所の悲劇を出現させてしまう非当事者の優位性・暴力性を引き受けながら、二人のアーティストは悲惨な現実以上の何を舞台に召喚するのだろうか。

Emerging artist duo Silke Huysmans and Hannes Dereere are gaining traction as new innovators of documentary theater. Without uttering a single word on stage, they use an iPhone to bring the reality of Naulu, a small Pacific island-state, to life. Once described as the richest nation in the world due to phosphate mining, the island-state was stripped dry of all natural resources and left to file for bankruptcy. In exchange for large sums of financial aid, it now serves as a detention camp for Australia's asylum-seekers.

Depleted of ecological, economic, and humanitarian means, this "pleasant island" foreshadows a potential encroaching future. With their ability to reveal the tragedy of other societies through simple movements of their fingers, the two artists assume both the superiority and violence that come with their position as outsiders. Within this framework, what else might they summon to the stage beyond devastating reality?

**クレジット**

演出｜ジルケ・ユイスマンス&ハネス・デレーレ
ドラマトゥルク｜ドリス・ドゥイビ
テクニカル｜アン・ムーセン、ピート・デポールテレ、ベンジャミン・ヴェルブルガ
サウンドミキシング｜リーヴェン・ドゥセラーレ
制作｜カンポアーツセンター
共同制作｜クンステンフェスティバルデザール、ユトレヒト・スプリングフェスティバル、ブールスカウブルフ劇場、ピアノファブリック・アーツセンター、ヴェームハウス劇場、ミュンヘン・シュピラート演劇祭、デ・ブラッケ・フロント
滞在｜ブールスカウブルフ劇場、デ・フロートポストカルチャーセンター、カープアーツセンター、ブダ芸術センター、ピアノファブリック・アーツセンター、音楽劇場LOD、ストゥック・パフォーミングアーツセンター、ヴェームハウス劇場
助成｜フランダース政府アーツコミッション、カープアーツセンター
特別協力｜ナウル島の人々
–
日本語字幕｜戸田史子
通訳｜田村かのこ（Art Translators Collective）

**Credit**

By & With｜Silke Huysmans & Hannes Dereere
Dramaturge｜Dries Douibi
Technical｜Anne Meeussen, Piet Depoortere, Benjamin Verbrugge
Sound Mixing｜Lieven Dousselaere
Production｜CAMPO arts centre
Co-production｜Kunstenfestivaldesarts, Spring Festival Utrecht, Beursschouwburg, Kunstenwerkplaats Pianofabriek, Veem House For Performance, Theaterfestival SPIELART München, De Brakke Grond
Residencies｜Beursschouwburg, De Grote Post, KAAP, Kunstencentrum Buda, Kunstenwerkplaats Pianofabriek, LOD, STUK, Veem House for Performance
With the support of Vlaamse gemeenschapscommissie, KAAP
Many thanks to all conversation partners in Nauru
–
Japanese subtitles｜Fumiko Toda
Interpreter｜Kanoko Tamura (Art Translators Collective)

**プロフィール**

ジルケ・ユイスマンス&ハネス・デレーレ｜1989年ブラジルに生まれ、2013年ゲントのKASK芸術学校で演劇プログラムを卒業したジルケ・ユイスマンスと、1990年オランダ生まれで2014年にゲント大学で演劇の学位を取得したハネス・デレーレによるユニット。ドキュメンタリー手法に強い関心を寄せ、フィールドワークやインタビューによるリサーチをもとにした作品を上演している。ブラジル南部での鉱山災害の影響を調査し制作した処女作『Mining Stories』（2016）は、スイス・チューリッヒの国際演劇祭テアター・シュペクターケルで「最優秀作家賞」を受賞した。

**Profile**

Silke Huysmans and Hannes Dereere | A unit of two young theatre-makers whose work is based on concrete situations, events or places that stand for a broader theme. Silke completed the drama programme at the KASK School of Arts in Ghent in 2013. Hannes obtained his degree in theatre studies at Ghent University one year before that. Since then, they have been developing a strong interest in documentary elements in theatre. Their first piece, *Mining Stories* (2016), represented a next step in this research, as they explored the impact of a recent mining disaster in the south of Brazil, the region where Silke grew up. *Mining Stories* (2016) was awarded with the Zürcher Theater Spektakel Patronage Prize in 2018.

©Bart Dewaele

©Aichi Triennale 2019 Photo: Shun Sato

# 小泉明郎
## Meiro Koizumi

演劇公演

Theater

# 縛られたプロメテウス
## Prometheus Bound

**日時**

**3月3日**［火］
14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/
17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30（終演20:30）

**3月4日**［水］-**6日**［金］
12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/
15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/
18:00/18:30/19:00/19:30（終演20:30）

**3月7日**［土］
12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/
15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00（終演19:00）

**Dates**

**March 3rd [Tue]**
14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/
17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30

**March 4th [Wed]-6th [Fri]**
12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/
15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/
18:00/18:30/19:00/19:30

**March 7th [Sat]**
12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/
15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00

**上演時間**

約60分　＊入れ替え制

**Performance times**

approx. 60 min. *Tickets are valid for one performance only.

**会場**

**港区立台場区民センター**
〒135-0091 港区台場1-5-1 台場コミュニティーぷらざ内

**Venue**

**Daiba Civic Center**
Daiba Community Plaza, 1-5-1 Daiba, Minato-ku, Tokyo 135-0091

## 仮想現実が生み出す、陶酔と覚醒。VR演劇史の幕開けを告げる衝撃作が東京に。

**Meiro Koizumi brings to Tokyo his unsettling work of virtual-reality-induced intoxication and awareness, marking the dawn of VR theater history.**

国家・共同体と個人の関係、人間の身体と感情の関係について探求する映像作家・小泉明郎。暴力や自己犠牲の感情が生まれるメカニズムを考察し、当事者たちの感情を追体験させる演劇的な映像は、美術界のみならず世界の演劇界からも大きな注目を集めている。

あいちトリエンナーレ2019からの委嘱を受け、VR技術を使った初の本格的演劇作品に挑んだ本作の出発点は、ギリシャ悲劇『縛られたプロメテウス』（アイスキュロス作）。未来を予見する能力を持ちつつも、ゼウスから火を盗み、人間に与えた罪で永劫の苦しみを味わうプロメテウス。この神話的時間から発想された近未来の中で、観客は、自分とは異なる「他者」の感覚や感情を追体験する。VRによって身体と知覚を拡張させたその先で、私たちが経験するのは、ユートピアか、ディストピアか?

Meiro Koizumi is a video artist who explores the relationships between the state/collective and the individual, and between the human body and emotions. Koizumi examines the mechanisms producing the motivation for violence and self-sacrifice; his video works, which incorporate elements of theater that invite the viewer to experience the emotions of their subjects, are gaining real traction in the theatrical world as well as the art world.

Koizumi's first ever full-fledged theater piece using VR technology, which he is taking on in response to his Aichi Triennale 2019 commission, takes Greek tragedy *Prometheus Bound* (Aeschylus) as its point of departure. Despite his ability to foresee the future, Prometheus suffered eternal pain for the crime of stealing fire from Zeus and giving it to mankind. In a near future conceived on the basis of this mythical age, the audience will be made to inhabit the senses and emotions of "others" different to themselves. Will it be a utopia or dystopia that we experience through VR's expansion of our bodies and senses?

**参加方法**

要予約・コモンズパス提示　＊未就学児入場不可

**How to Participate**

Booking essential.
Show general admission pass on entry.
*No entry for preschoolers

**上演言語**

日本語（英語副音声・字幕つき）

**Language**

Japanese (with supplementary audio and subtitles in English)

**クレジット**

構成・演出｜小泉明郎
VR制作｜ABAL株式会社
撮影ディレクター｜森内康博
照明｜杉本篤
録音｜藤口諒太
撮影助手｜中村碧
演出助手｜小山渉
製作｜あいちトリエンナーレ2019、小泉明郎

**Credit**

Concept and Direction｜Meiro Koizumi
VR Production｜ABAL inc.
Director of Photography｜Yasuhiro Moriuchi
Light｜Atsushi Sugimoto
Recording｜Ryota Fujiguchi
Camera Assistant｜Aoi Nakamura
Assistant Director｜Wataru Koyama
Production｜Aichi Triennale 2019, Meiro Koizumi

**プロフィール**

小泉明郎（こいずみ・めいろう）｜1976年群馬県生まれ。国際基督教大学卒業後に渡英し、ロンドンのチェルシー・カレッジで映像表現を学ぶ。近年はニューヨーク近代美術館のProjectsやテート・モダンのBMWテート・ライブをはじめ、国内外の数多くの展覧会に参加。2015年には初期作品から新作までを揃えた初の大規模個展「捕われた声は静寂の夢を見る」をアーツ前橋で開催。2017年、vacantで開催された個展「帝国は今日も歌う」は社会と個人の心理に深く切り込む大胆な映像で大きな反響をよんだ。

**Profile**

Meiro Koizumi｜Koizumi studied at the International Christian University, Tokyo (1996-1999), Chelsea College of Art and Design, London (1999-2002), and Rijksakademie van beeldend kunsten, Amsterdam (2005-2006). His previous solo exhibitions include "Trapped Voice Would Dream of Silence" at Arts Maebashi (2015), "Project Series 99: Meiro Koizumi" at Museum of Modern Art, New York (2013), "Stories of a Beautiful Country" Centro de Arte Caja de Burgos (CAB), Spain (2012), "Defect in Vision" at Annet Gelink Gallery, Amsterdam (2012), MAM Project 009 at Mori Museum, Tokyo (2009). He participated in numerous group shows such as, "Future Generation Art Prize" at Pinchuk Art Center, Kiev (2012), "Invisible Memories" at Hara Museum, Tokyo (2011), Liverpool Biennial (2010), Media City Seoul (2010), and Aichi Triennale, Japan (2010).

©Meiro Koizumi

Photo: SpaceX

# ナフーム［メキシコ／ドイツ］
# Nahum [Mexico/Germany]

レクチャーパフォーマンス

Lecture Performance

## Another Life／軌道のポエティクス
## Another Life / Orbital Poetics

**日時**

3月7日［土］14:00
3月8日［日］14:00

**Dates**

March 7th [Sat] / 14:00
March 8th [Sun] / 14:00

**上演時間**

約120分

**Performance times**

approx. 120 min.

**会場**

ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

**Venue**

Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

**参加方法**

要予約・コモンズパス提示

**How to Participate**

Booking essential.
Show general admission pass on entry.

**上演言語**

英語（日本語逐次通訳つき）

**Language**

English (with Japanese interpretation)

## 個人の記憶から宇宙までを自在に行き来し、感覚と身体の地平を詩的に考察するレクチャーパフォーマンス。

**Nahum takes us on a journey to reflect on our future existence on Earth, presenting a lecture-performance that poetically examines our intimate relationship with the universe.**

メキシコ出身、現在はベルリンを拠点に活動するアーティスト、ナフーム。その手法は宇宙技術、イリュージョン、催眠術、音楽と多岐にわたる。また、来たるべき「宇宙文化政策」を探求するプラットフォーム「KOSMICA」を創設し、芸術と人文科学、宇宙分野と社会をつなぐユニークな視点で活動を展開している。

今回はシアターコモンズの委嘱を受けて、二部構成のパフォーマンスを上演。第一部は、ヒプノシス（催眠）を用い、観客それぞれが生活するかもしれない「未来の世界」へと連れて行く。続く第二部は、NASAらとの連携のもと宇宙空間で実施したプロジェクトについてのレクチャーパフォーマンスを披露する。その試みは、私たちの知覚や精神的体験に深く入り込み、現実と想像の間を行き来しながら世界の見方を変容させるはずだ。

Nahum is an artist from Mexico who is currently based in Berlin. His method crosses many fields ranging from space technology and illusion to hypnotism and music. He also founded KOSMICA, a space agency that explores the ever-imminent “cultural policies of outer space.” His practice pulls from a unique perspective connecting the humanities and arts with outer space and society.

Commissioned by Theater Commons Tokyo, he presents a two-part performance. In the first half, he uses hypnosis to lead the audience to a “future world” that they may one day inhabit. In the second, he gives a lecture-performance to navigate through a selection of his artworks and collaborations with space organizations including ISU, ESA, NASA and SpaceX. This endeavor reaches deep inside our perception and spiritual experience, traveling between reality and fantasy to transform our worldviews.

**クレジット**

構成・演出・出演｜ナフーム
製作｜ナフーム・スタジオズ
協力｜ゲーテ・インスティトゥート東京

**Credit**

Concept, Direction and Performance｜Nahum
Production｜Nahum Studios
Support｜Goethe-Institut Tokyo

**プロフィール**

ナフーム｜ベルリンを拠点とするアーティスト、音楽家。メキシコ出身。宇宙テクノロジーと瞑想的メソッドを用いて、人々の可能性を拡張する作品・体験を発表し続ける。人類の宇宙活動における詩的かつクリティカルな創造性を探求するグローバル機関「KOSMICA」を主宰、現在まで20ヶ所以上の国・地域で活動。2014年、IAF（国際宇宙航行連盟）に宇宙活動への文化的貢献が認められヤング・スペース・リーダーに選出されたほか、パリの同連合による文化用途技術委員会の議長を務める。https://nahum.xyz

**Profile**

Nahum｜Born in 1979, Mexico City. Artist and musician based in Berlin. His pieces go deep into the human experiences by challenging our perceptions through unusual experiences, space technologies and meditative methods. Nahum is the founding director of KOSMICA, a global institute with the mission to establish a platform for critical cultural and poetic discourse on our relationship with outer space. He served as the Chair for the Committee for the Cultural Utilisation of Space (ITACCUS), at the International Astronautical Federation (IAF) in Paris. In 2014, he was the first artist to be awarded the title of Young Space Leader for his unique cultural contributions to astronautics and space exploration. His work has been exhibited and performed internationally. https://nahum.xyz

# キュンチョメ
# Kyun-Chome
–
# いちばんやわらかい場所
## Softest Places

ワークショップ
Workshop

**日時**
3月1日［日］13:00-16:00
3月2日［月］13:00-16:00

**Dates**
March 1st [Sun] / 13:00-16:00
March 2nd [Mon] / 13:00-16:00

**上演時間**
約3時間

**Performance times**
approx. 3 hours

**会場**
港区内　*詳細は参加者に個別に連絡

**Venue**
Participants will be individually informed of the venue, which is planned to be in Minato ward.

**参加方法**
無料・要予約（応募者多数の場合は抽選）
募集期間｜2020年1月20日［月］-2月10日［月］
（結果は2月14日［金］までにメールにて通知）
定員｜各回20名（応募者多数の場合は抽選）

**How to Participate**
Free / Booking essential. (in case of high demand, entry will be allocated by lottery)
- Application period: January 20th-February 10th, 2020 (applicants will be notified of the results by email by February 14th)
- Number of places: 20 (in case of high demand, entry will be allocated by lottery)



## ボロボロになった記憶と、ぬいぐるみを持って、街を歩く。私たちが踏みつけてきた「やわらかいもの」ともう一度出会う、儀式的ワークショップ。

**Strolling through the city with stuffed animal and tattered memories in hand, a ritualistic workshop brings us back into contact with our repressed “softness.”**

自らの嗅覚と欲望に従って国内外各地に中長期にわたり滞在、行為（アクション）、リサーチ、インタビュー、映像制作を繰り返し、その土地の最もコアな現実に切り込んでいくアートユニット、キュンチョメ。自らが行為者となって対象と向き合い、人々が抱える感情や矛盾をあぶり出す作品は、今、若い世代を中心に圧倒的な共感を得ている。

今回彼らが企画するのは、20名もの参加者を募って行う儀式的ワークショップだ。その中心に据えられるのは、誰もが幼少期を共に過ごしながら、いつしかその存在を忘れてしまっているぬいぐるみたち。あなたが子供の頃に一番大切にしていたぬいぐるみは、今どこにあるのだろうか。参加者たちはキュンチョメが仕掛ける集団および個人でのアクションを通じて、各自の無意識に存在する「いちばんやわらかい場所」を暴いていくことになる。

Following their keen instincts and appetites, artist unit Kyun-Chome conducts medium to long term residencies both at home and abroad, engaging in a series of “actions,” research endeavors, interviews, and video creations in order to dig deep into the core reality of a given place. Engaging with their subjects as active participants themselves, their work exposes people’s inner emotions and contradictions and is currently proving overwhelmingly relatable, particularly amongst the youth.

For TCT’20, they will gather about 20 participants to hold a ritualistic workshop. At the center of this will be stuffed animals, objects with which we all shared our childhoods and that we all one day forgot. Where is the stuffed animal you loved the most as a child now? Through the group created by Kyun-Chome and through their individual actions, participants will divulge their own unconscious “softest places.”

**注意事項**
・子供の頃にいちばん大切にしていたぬいぐるみをお持ちください。
・動きやすい服装（スカートではなくパンツスタイル）でお越しください（野外開催のため防寒対策をお願いします）。
・閉所恐怖症、不潔恐怖症、ハウスダストアレルギーなどをお持ちの方は事前にご連絡ください。
・詳細は参加者にメールにてご連絡します。

**Note**
- Please bring the stuffed animal you loved the most as a child.
- Please wear clothing that does not restrict movement (pants, not skirts) (the workshop will be held outside, so please dress for the weather.)
- Please inform us in advance if you are claustrophobic, germaphobic, or allergic to house dust.
- Participants will receive details by email.

**上演言語**
日本語

**Language**
Japanese

**クレジット**
構成・演出・出演｜キュンチョメ

**Credit**
Concept, Direction and Performance｜Kyun-Chome

**プロフィール**
キュンチョメ｜2011年にホンマエリとナブチの男女二人によって結成されたアートユニット。これまで福島、石巻、沖縄、香港、ベルリンなど、社会の分断を抱えた地域での活動を、主に映像インスタレーションとして発表。あいちトリエンナーレ2019で映像インスタレーション《声枯れるまで》、《私は世治》を発表。韓国・江陵国際ビエンナーレ2018、Reborn-Art Festival 2017などに参加。2016年には、個展「暗闇でこんにちは」を駒込倉庫で開催。

**Profile**
Kyun-Chome｜Formed in 2011, Kyun-Chome is an artist unit comprised of the female-male duo Eri Homma and Nabuchi. They have created work, mainly in the form of video installation, in socially divided areas such as Fukushima Prefecture, Ishinomaki City, and Okinawa Prefecture, as well as in Hong Kong and Berlin. In 2016 they held solo exhibition *Hi in the darkness* in Komagome Soko, Tokyo. Participated in Reborn-Art Festival 2017, Gangwon International Biennale 2018, and recently designed an installation *Until my voice dies* for Aichi Triennale 2019.

Photo: Masahiro Hasunuma

# 芸術祭の時代における危機管理ワークショップ
## A Crisis Management Workshop in the Age of Arts Festivals

レクチャー｜ワークショップ
Lecture｜Workshop

**日時**

2月27日［木］14:00-18:00
3月1日［日］13:00-17:00
3月3日［火］13:00-17:00
*各回とも同じ構成ですが、講師は日によって異なります。ご了承ください。

**上演時間**

約4時間

**会場**

港区内　*詳細は申込者に個別に連絡

**参加方法**

要予約・コモンズパス提示
募集期間｜2020年1月20日［月］-2月10日［月］
（結果は2月14日［金］までにメールで通知）
定員｜各回30名
*応募者多数の場合は、応募内容をふまえ事務局にて選考をさせていただきます。予めご了承ください。

**Dates**

February 27th [Thu] / 14:00-18:00
March 1st [Sun] / 13:00-17:00
March 3rd [Tue] / 13:00-17:00
*Please note that each session follows the same structure with different instructors.

**Performance times**

approx. 4 hours

**Venue**

Participants will be individually informed of the venue, which is planned to be in Minato ward.

**How to Participate**

Booking essential.
Show general admission pass on entry.
-Application period: January 20th-February 10th, 2020 (applicants will be notified of the results by email by February 14th)
-Number of places: 30
*Please note that we will be reviewing and selecting participants in the case of many applicants.



## 創作と表現の自由を守り育てるために―。アートの現場における危機管理を相互に学び合うワークショップ。
**Come join our workshop for mutual education on crisis management in art production to protect and nurture creativity and freedom of expression.**

全国各地で盛んに開催される芸術祭や文化イベント。オリンピックを前に加速するこれらの事業を通じて芸術が社会に開かれれば開かれるほど、多様な意見や批判が生まれ、時には悪意ある攻撃にさらされるリスクも拡大するだろう。

このような状況を受けてシアターコモンズでは、「芸術祭における危機管理」について、芸術祭に関わる主催者や事務局、助成団体、参加アーティストなど異なる立場の視点から相互に学び合うワークショップを開発。講師にはあいちトリエンナーレ2019で発足したJアート・コールセンターのメンバーや芸術祭事務局担当者、弁護士、危機管理専門家らを招き、レクチャーやグループワークを通じて参加者同士の知見を共有・交換する。

Many arts festivals and cultural events are held across Japan. As these projects increase in number and frequency prior to the Olympics, the arts become more accessible to society and a range of opinions and criticisms follow suit. This will likely increase the potential risk of malicious attacks.

In response to these circumstances, we at Theater Commons Tokyo have developed a workshop for mutual education through the perspectives of different positions related to arts festivals. This involves organizers, committee offices, grant organizations, and participating artists. We invite instructors including members of the J Art Call Center created through Aichi Triennale 2019, arts festival office staff members, lawyers, and experts in crisis management. Through lectures and group exercises, participants will share and exchange their insights.

**注意事項**

・本ワークショップは、芸術文化事業・施設の企画・運営・管理に関わるプロフェッショナル（行政機関、助成機関、芸術祭事務局、アートNPO等の職員、アート事業の企画立案者等）を主な対象に実施いたします。
・本ワークショップでは、参加前に身分証の提示および守秘義務へのサインをお願いしております。予めご了承のうえお申し込みください。

**Note**

- This workshop is mainly designed for professionals working in programming, operations, and management for arts and culture projects and institutions (including those who work for governmental and grant institutions, arts festival offices, art non-profits, and content creators for art projects.)
- Please note before applying that we ask participants to bring their IDs and sign a non-disclosure agreement before the workshop.

**上演言語**

日本語

**Language**

Japanese

**クレジット**

企画｜相馬千秋
監修｜高山明

**Credit**

Producer｜Chiaki Soma
Supervisor｜Akira Takayama

**プロフィール**

Jアート・コールセンター｜あいちトリエンナーレ2019で「表現の不自由展・その後」を一時中止に追い込んだ電凸対策として、演出家・高山明の発案で組織された合同会社。「表現の不自由展・その後」が再開された7日間、ReFreedom_Aichiに賛同するアーティストやキュレーターらが実際にコールセンターで抗議電話に応答し、抗議者との直接的な対話を行った。今後も現実の社会問題に対して実装可能な演劇プロジェクトとして継続的に活動を行う予定。

**Profile**

J Art Call Center｜J Art Call Center is a limited liability company formed by theater director Akira Takayama following the temporary closure of the “After ‘Freedom of Expression?’” exhibition at the Aichi Triennale 2019, as a countermeasure against the flooding of phone lines experienced by the art festival. In the seven days of the exhibition’s reopening, the artists and curators supporting ReFreedom_Aichi took protest calls and engaged in direct dialogue with the protestors. The company expects to continue its work uninterrupted as a theater project that can be brought to bear against real-life social issues.

Jアート コールセンター
050-3177-4593
12:00から20:00まで

# リーディング・パフォーマンス　Reading Performance

慶應義塾大学 旧ノグチ・ルーム　写真：新良太

## 2020年の東京で、声に出して戯曲を読む。東京の日常に媚薬を垂らし、波紋を広げるリーディング・パフォーマンス。

声に出して戯曲を読む。演劇にとって最もシンプルな営みは、俳優だけではなく、あらゆる人に開かれている。だが、実際に一つの戯曲を最初から最後まで声に出して読んだ経験がある人は意外と少ないものだ。それでは今、オリンピックを目前に控えた東京で、自分が声に出して読むとしたら、どこで、どんな言葉だろうか？

リーディング・パフォーマンスと題する本企画は、この問いを投げかけられた2人の演出家が提案する戯曲を、ある場所で、複数の参加者が初見で音読するというものだ。特別な準備や練習もない、ただ、戯曲に書かれた言葉を、たまたま居合わせた他の参加者とともに、声に出して読む。過去に書かれた言葉は、2020年の東京に生きるあなた自身の身体を経由し、「いま、ここ」にどのような変容をもたらすのか。2人の演出家が仕掛けるささやかな音読の時間と空間は、都市・東京の日常に、媚薬のように波紋を広げることになるだろう。

## Tokyo, 2020. An aphrodisiac splashes into our day-to-day routines, creating a ripple effect across the city — someone reads aloud from a script in *Reading Performances*.

Reading a script aloud is theater's most basic activity, accessible to all — not only actors. There are, however, surprisingly few people who have actually read an entire play out loud from beginning to end. If one were to do so now, then — somewhere in Tokyo as it awaits the Olympics — where should one read and whose words should one choose?

We posed this question to two directors. In this series, which is titled *Reading Performances*, cold readings of the plays two directors have proposed will be held in specific locations by a variety of participants: no special preparations, no rehearsals, thrown together randomly, just reading aloud from the words in the script. Written in the past, how will these words be transformed in the here and now by passing through the bodies of those who live in Tokyo in 2020? The times and places selected for these modest readings will figure as aphrodisiacs, creating ripple effects in the city's day-to-day routines.

リーディング
Reading

# 市原佐都子／ジャコモ・プッチーニ
## Satoko Ichihara / Giacomo Puccini

–

# 蝶々夫人
## Madama Butterfly

**日時**
2月29日［土］14:00
3月5日［木］13:00
3月6日［金］16:00
3月8日［日］12:00

**Dates**
February 29th [Sat] / 14:00
March 5th [Thu] / 13:00
March 6th [Fri] / 16:00
March 8th [Sun] / 12:00

**上演時間**
約120分

**Performance times**
approx. 120 min.

**会場**
慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
〒108-8345 港区三田2-15-45

**Venue**
Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345

**参加方法**
要予約・コモンズパス提示

**How to Participate**
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

## 西洋／男性から眼差されてきた日本／女性のステレオタイプ「蝶々夫人」。その非対称な欲望を裏返す、倒錯的リーディング。
**Presenting a perverse reading inverting the asymmetrical desires of Madama Butterfly's stereotypes of Japan/women as seen from the West/men.**

今から130年前、フランス人作家ピエール・ロティは軍人として長崎港に逗留し、現地妻との生活をエッセイ「お菊さん」としてフィガロ紙に連載した。その10年後、アメリカ人作家ジョン・ルーサー・ラングが小説『マダム・バタフライ』を発表、その原作をもとにプッチーニがオペラ『蝶々夫人―日本の悲劇』を初演したのは1904年のことだ。それから120年が経った今でも人気オペラであり続ける「蝶々さん」のイメージは、「日本人女性」に向けられるオリエンタリズムの眼差しと未だに無縁ではない。

人間の生と性に関わる違和感を大胆かつ緻密に描く劇作家・演出家の市原佐都子は、2020年の今あえて、西洋と東洋、男と女の間の圧倒的不均衡から生まれた物語を集団音読のテキストに選んだ。15歳の芸者が米国軍人の現地妻として差し出され、夫の帰りを3年待った挙句に、本妻との帰還を知って自害する。この救いどころのないメロドラマを、現在の私たちはいかに善悪を超えて笑い飛ばすことができるのだろうか。

130 years ago, French writer Pierre Loti was stationed at Nagasaki Port and serialized his affair with a Japanese woman in the essays "Madame Chrysanthème," published in *Le Figaro*. 10 years later, American writer John Luther Long published the short story *Madame Butterfly*; 1904 then saw the premier of Giacomo Puccini's opera *Madama Butterfly*, based on Long's work. Still popular 120 years later, the essence of this opera remains tied to the orientalist gaze cast upon Japanese women.

Playwright and director Satoko Ichihara, who boldly and elaborately depicts unease around human life and sexuality, has decided to take on this story — born of the overwhelming disequilibrium between West and East, men and women — as the text for a group reading in this year of 2020. A 15 year old geisha is given in "marriage" to an American soldier; she waits for her return for three years, ultimately committing suicide upon discovering that he has gone back to his real wife. How might we, today, transcend matters of good and evil to laugh off this irredeemable melodrama?

**注意事項**
各回定員約20名
（お申込いただいた皆様に音読の一部を担っていただきます）

**Note**
Each performance is limited to 20 people (exceptions for special cases aside, everyone present will be given part of the play to read)

**上演言語**
日本語

**Language**
Japanese

**クレジット**
構成・演出・テキスト｜市原佐都子
台本｜オペラ「蝶々夫人」より
共催｜慶應義塾大学アート・センター

**Credit**
Concept, Direction and Text｜Satoko Ichihara
Text from Opera *Madama Butterfly*
Co-organized by Keio University Art Center

**プロフィール**
市原佐都子（いちはら・さとこ）｜劇作家・演出家・小説家。1988年大阪府生まれ、福岡県育ち。桜美林大学にて演劇を学び、2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2017年『毛美子不毛話』が第61回岸田國士戯曲賞最終候補となる。2019年に初の小説集『マミトの天使』を出版。同年ギリシャ悲劇を下敷きとした新作『バッコスの信女―ホルスタインの雌』をあいちトリエンナーレにて世界初演。本作は2020年世界演劇祭（ドイツ）でも上演予定。公益財団法人セゾン文化財団ジュニア・フェローアーティスト。

**Profile**
Satoko Ichihara｜Playwright, director and novelist. Born 1988 in Osaka, raised in Fukuoka Japan.Studied theater at J.F. Oberlin University. Ichihara Satoko has led the theater company Q since 2011. She writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. 2011, Receives the Aichi Arts Foundation Drama Award with the play *Insects*. 2017, Nominated for finalist of 61st Kishida Kunio Playwriting Prize for "Favonia's Fruitless Fable". In 2019, she published her first collection of stories, *Mamito no tenshi* (*Mamito's Angel*). Her latest work *The Bacchae – Holstein Milk Cows*, based on a Greek tragedy, premiered at Aichi Triennale 2019. The piece travels to Theater der Welt in 2020. She is a Junior Fellow of The Saison Foundation.

Photo: Mizuki SATO

Photo: Taro Motofuji

リーディング
Reading

# 中村大地／松原俊太郎
## Daichi Nakamura / Shuntaro Matsubara

# 正面に気をつけろ
## Keep Your Front Up

**日時**
3月5日［木］16:00
*終演後、ポストトーク有、ゲスト｜松原俊太郎
3月6日［金］13:00
3月8日［日］15:00

**Dates**
March 5th [Thu] / 16:00
*Talk (after the performance), Guest｜Shuntaro Matsubara
March 6th [Fri] / 13:00
March 8th [Sun] / 15:00

**上演時間**
約120分

**Performance times**
approx. 120 min.

**会場**
慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
〒108-8345 港区三田2-15-45

**Venue**
Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345

**参加方法**
要予約・コモンズパス提示

**How to Participate**
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

**注意事項**
各回定員約20名（お申込いただいた皆様に音読の一部を担っていただきます）

**Note**
Each performance is limited to 20 people (exceptions for special cases aside, everyone present will be given part of the play to read)



## 「そういうわけで、この国にあるのは一本の道だけだ」身体と脳に注入される松原戯曲のエネルギーを、集団で体感せよ。
**“And that’s why this country only has a single road.” Experience as a group the pervasive energy of Matsubara’s play.**

2019年に第63回岸田國士戯曲賞を受賞し、その賛否も含め演劇界に衝撃を与えた気鋭の劇作家、松原俊太郎。「立ち止まってくれ。ちょっと話そう。わたしたちは二十一世紀を迎え、同じ方向に逃げる群れとなった」。こう始まる代表作『正面に気をつけろ』は、ブレヒトの未完の戯曲『ファッツァー』をモチーフに「ここにいてはならない4人の死者たち」が、目の前に続く一本の道を正面に向かって進み続ける物語だ。様々なものが正面からやってくる。掟の門を守る門番と書記、作業員、物見遊山する女たち、略奪者…やってくるものの重みで道は傾きはじめる。果たしてこの道はどこへと続くのか。

東北と東京を行き来しながら思索を続ける若き演出家、中村大地は、この戯曲が放つ巨大なエネルギーを、同時代に生きる観客との発話を通じて集団的経験へと再編成する。過去と未来、あの世とこの世の狭間の一本道で、亡霊のように繰り返し立ち現れる戦争や震災、民主主義の挫折という大きな物語／歴史。この言葉を注入され続ける「わたしたち」の身体と脳は、どんな衝撃と変容を体感するのだろうか。

Shuntaro Matsubara is the up-and-coming playwright who won the 63rd Kishida Prize for Drama, shocking both supporters and detractors across the theater world. “Stop. Let’s talk for a second. We’ve entered the 21st century, and we’ve turned into a mob all fleeing in one direction.” So begins *Keep Your Front Up*, which takes Bertolt Brecht’s unfinished play *Downfall of the Egotist Johann Fatzer* as its motif. It is the story of four out-of-place dead people who continue directly ahead down a single road. A variety of people emerge in front of them: the gatekeeper and secretary guarding the gates of law, workers, vacationers on a girls’ trip, marauders...the road begins to buckle under their weight. Where does it truly lead?

Young director Daichi Nakamura, who engages in contemplation between Tohoku and Tokyo, redirects the bold energy emitted from this play through the voices of contemporary audiences and toward a collective experience. Here we find a grand narrative/history of wars and earthquakes, the setbacks of democracy — haunting us like ghosts along this road that lies in the gap between past and present, this world and the next. What kind of shock and transformation will “our” minds and bodies undergo when continually infused with these words?

**上演言語**
日本語

**Language**
Japanese

**クレジット**
構成・演出｜中村大地
作｜松原俊太郎
共催｜慶應義塾大学アート・センター

**Credit**
Concept and Direction｜Daichi Nakamura
Written by Shuntaro Matsubara
Co-organized by Keio University Art Center

**プロフィール**
中村大地（なかむら・だいち）｜作家、演出家。1991年東京都生まれ。東北大学文学部卒。在学中に劇団「屋根裏ハイツ」を旗揚げし、8年間仙台を拠点に活動。2018年より東京に在住。人が生き抜くために必要な「役立つ演劇」を志向する。近作『ここは出口ではない』で第2回人間座「田畑実戯曲賞」を受賞。「利賀演劇人コンクール2019」ではチェーホフ『桜の園』を上演し、観客賞受賞、優秀演出家賞一席となる。

松原俊太郎（まつばら・しゅんたろう）｜作家。1988年、熊本県生まれ。神戸大学経済学部卒。2015年、処女戯曲『みちゆき』で第15回AAF戯曲賞大賞受賞。2019年『山山』で第63回岸田國士戯曲賞を受賞。主な作品に『忘れる日本人』『正面に気をつけろ』『ささやかなさ』など。2019年度セゾン文化財団ジュニア・フェロー。

**Profile**
Daichi Nakamura｜Born in 1991 in Tokyo, Daichi Nakamura is a playwright and theater director. He graduated from the Department of Literature at Tohoku University. During his studies, he started the theater group Yaneura Heights and lived and worked in Sendai for eight years until moving to Tokyo in 2018. His work aims to create useful theater that provides the necessary tools for survival. He recently received the 2nd Ningen-za Tabata Minoru Prize for Drama for his latest work *Koko wa deguchi dewa nai* (*This Is Not an Exit*). For the 2019 Toga Theater Competition, he won the Audience Award and first place for Excellence in Direction Award for directing Anton Chekhov’s *The Cherry Orchard*.

Photo: Taro Motofuji

Shuntaro Matsubara｜Born in 1988 in Kumamoto Prefecture, Shuntaro Matsubara is a playwright. He graduated from the Department of Economics at Kobe University. In 2015, he won the 15th Aichi Arts Foundation Drama Award for his first play *Michiyuki* (*En Route*). In 2019, he received the 63rd Kishida Kunio Drama Award for *YAMAYAMA* (*I Would Prefer Not To*). His major works include *Wasureru Nihonjin* (*The Japanese, Who Forget*), *Shoumen ni kiwotukero* (*Keep Your Front Up*), and *Sasayakanasa* (*Modest Difference*). He is a 2019 Junior Fellow of The Saison Foundation.

# 芸術と社会
# 芸術と公共
# 芸術と仮想性
# 芸術と政治

あいちトリエンナーレ2019以後、「表現の自由」や「芸術の公共性」をめぐる議論が噴出している。分断と不和が可視化された今日の社会において、私たちはどこへ向かうのか。今回のシアターコモンズでは、この火急の状況への応答として、4回にわたるコモンズフォーラムを集中開催。「芸術と社会」「芸術と公共」「芸術と仮想性」「芸術と政治」という4つのテーマ設定のもと、国内外から総勢20名を超える論客を招き、合計10時間を超える議論の場を設ける。歴史と未来をつなぎ、理論と実践を行き来しながら、社会の分断を乗り越えるための芸術の可能性について立ち止まって考える共有地が、今こそここに立ち現れるはずだ。

Since Aichi Triennale 2019, discussions around freedom of expression and the public role of the arts have erupted. What are the next steps for this society exposed to its divisions and discords? As a response to this urgency, TCT'20 hosts a four-session Commons Forum intensive. Under the themes of "Arts and Society," "Arts and Public," "Arts and Virtuality," and "Arts and Politics," we welcome over 20 panelists from home and abroad for discussions totaling more than 10 hours. Weaving together history and future as well as theory and practice, we hope to emerge with some common ground where we can stop and consider the potential of the arts in overcoming social divisions.

Installation view at Aichi Triennale 2019 Hikaru Fujii "Mujō (The Heartless)", 2019 Photo: Ito Tetsuo

言論イベント
Panel Discussion

# コモンズ・フォーラム #1
# Commons Forum #1

–

# 芸術と社会
## Arts and Society

日時
2月29日［土］17:00-20:00

Date
February 29th [Sat] / 17:00-20:00

会場
リーブラホール
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

Venue
Libra Hall
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

参加方法
要予約・コモンズパス提示

How to Participate
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

上演言語
日本語

Language
Japanese

## 「わかりあえない者たち」をつなぐ芸術：敵対と不和を乗り越えるために。
## The arts as disentangling mutual incomprehension: overcoming hostility and discordance.

今、世界の至るところでポピュリズムが台頭し、分断が顕在化している。ネット社会によってさらに扇動される敵対と不和は、私たちが生きるフィジカルな現実世界の対話や安全をも脅かす力として可視化されつつある。だが、こうした敵対と不和をしっかりと見つめ乗り越えていこうとする不断の営みのなかにこそ、「公共」や「公共圏」は生まれうるのではないか。

本フォーラムでは、「わかりあえない者たち」が共存する世界を前提に、分断を社会のダイナミズムへと変換しうる芸術の可能性について議論する。先のあいちトリエンナーレやこれまで／これからのシアターコモンズでの実践を具体例に、社会関与型芸術（ソーシャリー・エンゲイジド・アート）やアート・アクティヴィズムの実効性や限界をめぐり、芸術批評、歴史社会学、キュレーション実践など複数の視点から未来への課題をえぐり出す。

The recent rise of populism around the world has revealed deep divisions. Further fomented by online discourse, hostility and discord are turning into visible forces that threaten our conversations and sense of safety within the physical world we inhabit. But perhaps "the public" or "the public sphere" may emerge precisely through tireless attempts to observe and overcome this hostility and discord.

Assuming a world where mutual incomprehension persists, we discuss in this forum the potential of the arts to transform societal division into dynamism. Using case studies spanning from the aforementioned Aichi Triennale to both past and future practices at Theater Commons Tokyo, we probe future-oriented agendas from many perspectives. Art criticism, historical sociology, and curatorial practices among others are considered in order to discuss socially engaged art, the viability and limitations of art activism, and other related topics.

登壇者 / Panelists

伊藤昌亮（いとう・まさあき）｜社会学者、『ネット右派の歴史社会学』著者
–
Masaaki Ito｜Sociologist, Author of *The Historical Sociology of Online Right-Wing*

藤井光（ふじい・ひかる）｜アーティスト
–
Hikaru Fujii｜Artist

相馬千秋（そうま・ちあき）｜あいちトリエンナーレ2019 キュレーター、シアターコモンズ ディレクター
–
Chiaki Soma｜Curator of Aichi Triennale 2019, Director of Theater Commons Tokyo

Photo: Yurika Kawano

司会 / Moderator

藤田直哉（ふじた・なおや）｜文芸評論家
–
Naoya Fujita｜Literary Critic

言論イベント
Panel Discussion

# コモンズ・フォーラム #2
## Commons Forum #2

–

# 芸術と公共
## Arts and Public

日時
3月3日［火］18:00-21:00

Date
March 3rd [Tue] / 18:00-21:00

会場
リーブラホール
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

Venue
Libra Hall
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

参加方法
要予約・コモンズパス提示

How to Participate
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

上演言語
日本語

Language
Japanese

## 「公の時代」の芸術：芸術の公共性を再定義するために。
## Redefining the public role of the arts in “the age of the public.”

「人を不快にする芸術には公的資金を投入すべきではない」という公人の発言が相次ぎ、それに賛同する公権力や不特定多数の存在がかつてない規模で可視化されている。だが、そもそも日本において「芸術の公共性」や「表現の自由」という概念が、十分に社会的コンセンサスとして形成されてきたとは言いがたい。地域振興や経済活性化、国家・都市のイメージ発信を優先してきた日本の文化政策の基盤が、今激しく揺らいでいる。

本フォーラムでは、芸術家、アートプロデューサー、文化政策研究者など、異なる立場の論客がそれぞれの実践を通じて志向する「公」の理念を持ち寄り、その一致点と差異から、芸術と社会における「公共」のあるべき形を議論する。その先に、政治や国際情勢に左右されない芸術文化助成の制度設計や、オリンピック以後の文化政策の未来が浮かび上がるだろう。

Numerous public figures have recently come forward with the view that public funding should not be used for art that disturbs people. Government authorities and the public that agree with this assertion have become visible more than ever before. To begin with, it would be difficult to say that the concepts of “the public role of the arts” and “freedom of expression” have found strong enough social consensus in Japan. And the basis of Japan’s cultural policy, which prioritizes boosting local economies and promoting the image of the nation and the city, is now drastically being undermined.
In this forum, opposing participants — including artists, art producers, cultural policy researchers and so on — bring ideas on “the public” that they explore in their practices. Through understandings and differences, we discuss the role that “the public” should serve within the arts and society. We intend for the conversation to continue on the future of post-Olympics cultural policies and on designing arts and culture grants free from the influence of political and international affairs.

登壇者 / Panelists

北川フラム（きたがわ・ふらむ）｜アートディレクター
–
Fram Kitagawa｜Art director

卯城竜太（うしろ・りゅうた）｜Chim↑Pomメンバー
–
Ryuta Ushiro｜Artist, Chim↑Pom

小林恵吾（こばやし・けいご）｜早稲田大学建築学専攻准教授、建築家、NoRA共同主宰
–
Keigo Kobayashi｜Associate Professor, Dept. of Architecture, Waseda Univ., Architect, Co-partner at NoRA

若林朋子（わかばやし・ともこ）｜プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授
–
Tomoko Wakabayashi｜Project Coordinator, Project Associate Professor of Rikkyo University Graduate School of Social Design Studies

Photo: Yuri Yasuda ©Ko Na design

司会 / Moderator

相馬千秋（そうま・ちあき）｜シアターコモンズ ディレクター
–
Chiaki Soma｜Director of Theater Commons Tokyo

Photo: Yurika Kawano

Aichi Triennale 2019 Performing Arts Meiro Koizumi “Prometheus Bound” Photo: Shun Sato

言論イベント
Panel Discussion

# コモンズ・フォーラム #3
# Commons Forum #3

–

# 芸術と仮想性
## Arts and Virtuality

**日時**
3月7日［土］17:00-20:00

**会場**
ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

**参加方法**
要予約・コモンズパス提示

**上演言語**
日本語（英語逐次通訳つき）

**Date**
March 7th [Sat] / 17:00-20:00

**Venue**
Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

**How to Participate**
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

**Language**
Japanese (with English interpretation)

## VR演劇史のはじまり：仮想現実は演劇的経験に何をもたらす？
## At the beginning of VR theater history, what can virtual reality bring to theatrical experiences?

フランスの詩人・演劇作家アントナン・アルトーがエッセイ「錬金術的演劇」（1932年）において、演劇はまるで錬金術のように、日常の表面下に潜むより危険な現実を、物理的に鋳造してみせる「la réalité virtuelle（ヴァーチャル・リアリティ）」である、と造語を用いて論じてから90年あまり。アルトーによって予言された「仮想現実」は今、進化を遂げるVRテクノロジーによって、私たち人間の知覚とその延長にある身体的現実を拡張し始めている。

本フォーラムでは、小泉明郎によるVR演劇作品『縛られたプロメテウス』の上演と、世界各地の専門家やキュレーターによるプレゼンテーションを踏まえ、人類とヴァーチャル・テクノロジーの間にあらたに生成され続ける関係性や、VRを活用した演劇的経験の可能性について議論を開く。

Around 90 years ago, French poet and playwright Antonin Artaud coined the term “virtual reality.” He argued that theater, like alchemy, is “la réalité virtuelle” that physically casts the more dangerous reality hidden beneath everyday life. Today, through the development of VR technology, this “virtual reality” that Artaud foresaw has begun to expand our human perception and, as an extension, our bodily reality.

Based on the performance of Meiro Koizumi’s VR theater piece *Prometheus Bound*, in this forum, we will discuss the continued relationship generated between humans and virtual technology as well as the potentialies of using VR in theatrical settings, and also offer presentations by experts and curators from around the world.

**クレジット**
協力｜ゲーテ・インスティトゥート東京
助成｜台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター、オランダ王国大使館、在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本
*本フォーラムは、第9回「デジタル・ショック」連携イベントです。
www.institutfrancais.jp/digitalchoc/

**Credit**
Support｜Goethe-Institut Tokyo
Supported by Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan, Embassy of the Kingdom of the Netherlands, Embassy of France in Japan / Institut français du Japon
*This forum is a related to “Digital Choc, 9th edition”
www.institutfrancais.jp/digitalchoc/

**登壇者 / Panelists**

マイケ・ブレーケル｜ユトレヒト大学演劇学教授、メディア＆パフォーマンス研究所主任
–
Maaike Bleeker｜Professor of Theatre, and research leader Media & Performance at Utrecht University

シャルル・カルコピノ｜キュレーター
–
Charles Carcopino｜Curator

© Paul Belêtre

リン・ジンヤォウ（林經堯）｜C-LAB台湾サウンドラボ ディレクター
–
Jinyao Lin｜Director of C-Lab Taiwan Sound Lab

小泉明郎（こいずみ・めいろう）｜アーティスト
–
Meiro Koizumi｜Artist

©Meiro Koizumi

**司会 / Moderator**

岩城京子（いわき・きょうこ）｜演劇パフォーマンス学研究者、アントワープ大学専任講師
–
Kyoko Iwaki｜Theatre and Performance Lecturer at University of Antwerp

Photo: Naoki Yamamoto

# コモンズ・フォーラム #4
## Commons Forum #4

言論イベント
Panel Discussion

–

# 芸術と政治
## Arts and Politics

**日時**
3月8日［日］17:00-19:30

**会場**
SHIBAURA HOUSE
〒108-0023 港区芝浦3-15-4
会場お問合せ｜03-5419-6446

**参加方法**
要予約・コモンズパス提示

**上演言語**
日本語（英語逐次通訳つき）

**Date**
March 8th [Sun] / 17:00-19:30

**Venue**
SHIBAURA HOUSE
3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023
Tel: 03-5419-6446

**How to Participate**
Booking essential.
Show general admission pass on entry.

**Language**
Japanese (with English interpretation)

## 芸術の政治化 VS 政治の芸術化：芸術的アクションは政治を変えるのか？
### Between the politicization of art and the aesthetics of politics, can artistic acts bring political change?

香港で長年アーティスト・ラン・スペースを運営し、社会にコミットする活動を続けてきたアーティスト・ユニット、C&G。その一人クララ・チュンは、昨年11月に実施された香港区議会議員選挙に立候補し、香港中心部・ワンチャイ地区の区議会議員に当選、地元の民主派から期待が高まっている。

第一部では、彼らによるレクチャーパフォーマンス『Am I a Ghost?（私は幽霊?）』を上演。自分を脅かすかもしれない異質な他者を尊重するとはどういうことか。一つの共同体における信頼と不和をめぐる考察が、アーティスト独自の形式で観客と共有されることになるだろう。続く第二部では、香港でリサーチや創作を行うアーティストやジャーナリストを交え、分断が深まる社会において、直接的政治アクションと芸術実践の相関関係、その実効性と限界について議論したい。

Artist duo C&G (Clara Cheung and Gum Cheng) has held an artist-run space in Hong Kong for many years, with their practice committed to social engagement. Clara Cheung ran for the Hong Kong District Council election last November. With support from local pro-democrats, she was elected as a councilor for Wan Chai District, a central area of the city.

For this two-part program, C&G will first present their lecture-performance *Am I a Ghost?* What does it mean to respect disparate others who may be threats to oneself? Through their unique style, the artists share with the audience their perspectives on trust and discord within a community. In the second half, we invite artists and journalists doing creative work or research in Hong Kong for a discussion on the correlation between direct action and artistic practice, and its effects and limits within an increasingly divided society.

**登壇者 / Panelists**

クララ・チュン（張嘉莉）｜アーティスト、C&Gアートディレクター、香港ワンチャイ区議会議員
–
Clara Cheung｜Artist, Art Director of C & G Artpartment, District Councilor in Wan Chai, Hong Kong

ガム・チェン（鄭怡敏）｜アーティスト、C&Gキュレーター
–
Gum Cheng｜Artist, Curator of C & G Artpartment

キュンチョメ｜アーティスト
–
Kyun-Chome｜Artist

津田大介（つだ・だいすけ）｜ジャーナリスト／メディア・アクティビスト、あいちトリエンナーレ2019芸術監督

Daisuke Tsuda｜Journalist, media activist, artistic director for Aichi Triennale 2019

**司会 / Moderator**

相馬千秋（そうま・ちあき）｜シアターコモンズ ディレクター
–
Chiaki Soma｜Director of Theater Commons Tokyo

Photo: Yurika Kawano

# 会場

# VENUES

### ゲーテ・インスティトゥート
### 東京ドイツ文化センター

〒107-0052 港区赤坂7-5-56
Tel: 03-3584-3201
東京メトロ銀座線・半蔵門線／
都営大江戸線「青山一丁目駅」4（北）出口より徒歩7分

### Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel: 03-3584-3201
Aoyama-itchome Station (Tokyo Metro Ginza or Hanzomon Lines / Toei Oedo Line): 7 minutes walk from 4 (North) Exit

### リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩5分
都営三田線・浅草線「三田駅」A6出口より徒歩6分

### Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023
Tamachi Station (JR): 5 minutes walk from East (Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines): 6 minutes walk from A6 Exit

### 慶應義塾大学三田キャンパス
### 旧ノグチ・ルーム

〒108-8345 港区三田2-15-45
慶應義塾大学三田キャンパス南館3Fルーフテラス
Tel: 03-5427-1621
都営三田線・浅草線「三田駅」A3出口より徒歩12分
JR「田町駅」西口（三田口）より徒歩13分
都営大江戸線「赤羽橋駅」赤羽橋口より徒歩13分
※慶應義塾大学南門（正門）より徒歩5分含む

### Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room

3F South Building, Keio University, 2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345
Tel: 03-5427-1621
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines): 12 minutes walk from A3 Exit
Tamachi Station (JR): 13 minutes walk from West (Mita) Exit
Akabanebashi Station (Toei Oedo Line): 13 minutes walk from Akabanebashi Exit
*including 5 minutes walk from South Gate (Main Gate) of Keio University

### SHIBAURA HOUSE

〒108-0023 港区芝浦3-15-4
Tel: 03-5419-6446
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩7分
都営三田線・浅草線「三田駅」A4出口より徒歩10分

### SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023
Tel: 03-5419-6446
Tamachi Station (JR): 7 minutes walk from East (Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines): 10 minutes walk from A4 Exit

### 港区立台場区民センター

〒135-0091 港区台場1-5-1
台場コミュニティーぷらざ内
新交通ゆりかもめ「お台場海浜公園駅」北口より徒歩3分
東京臨海高速鉄道りんかい線「東京テレポート駅」
出口Aより徒歩7分

### Daiba Civic Center

Daiba Community Plaza, 1-5-1 Daiba, Minato-ku, Tokyo 135-0091
Odaiba-kaihinkoen Station (Yurikamome Line): 3 minutes walk from North Exit
Tokyo Teleport Station (Rinkai Line): 7 minutes walk from A Exit

# スケジュール／SCHEDULE

リーディング・パフォーマンス
Reading Performance

コモンズ・フォーラム
Commons Forum

| アーティスト／演目 | 2 FEB 27 THU | 28 FRI | 29 SAT | 3 MAR 1 SUN | 2 MON | 3 TUE | 4 WED | 5 THU | 6 FRI | 7 SAT | 8 SUN |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| シャンカル・ヴェンカテーシュワラン<br>「インディアン・ロープ・トリック」<br>Sankar Venkateswaran<br>“Indian Rope Trick” | 19:00 | 19:00 | | | | | | | | | |
| ジルケ・ユイスマンス&ハネス・デレーレ<br>「快適な島」<br>Silke Huysmans & Hannes Dereere<br>“Pleasant Island” | | | | | | | | 19:00<br>ポストトーク有<br>Talk (after the performance) | 19:00 | | |
| 小泉明郎<br>「縛られたプロメテウス」<br>Meiro Koizumi<br>“Prometheus Bound” | | | | | | 14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30（終演20:30） | 12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30（終演20:30） | 12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30（終演20:30） | 12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30（終演20:30） | 12:00/12:30/13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30/18:00（終演19:00） | |
| ナフーム<br>「Another Life」／「軌道のポエティクス」<br>Nahum<br>“Another Life” / “Orbital Poetics” | | | | | | | | | | 14:00 | 14:00 |
| キュンチョメ<br>「いちばんやわらかい場所」<br>Kyun-Chome<br>“Softest Places” | | | | 13:00-16:00 | 13:00-16:00 | | | | | | |
| 市原佐都子／ジャコモ・プッチーニ<br>「蝶々夫人」<br>Satoko Ichihara / Giacomo Puccini<br>“Madama Butterfly” | | | 14:00- | | | | | 13:00- | 16:00- | | 12:00- |
| 中村大地／松原俊太郎<br>「正面に気をつけろ」<br>Daichi Nakamura / Shuntaro Matsubara<br>“Keep Your Front Up” | | | | | | | | 16:00-<br>ポストトーク有<br>Talk (after the performance) | 13:00- | | 15:00- |
| 「芸術祭の時代における<br>危機管理ワークショップ」<br>“A Crisis Management Workshop<br>in the Age of Arts Festivals” | 14:00-18:00 | | | 13:00-17:00 | | 13:00-17:00 | | | | | |
| コモンズ・フォーラム #1<br>「芸術と社会」<br>Commons Forum #1<br>“Arts and Society” | | | 17:00-20:00 | | | | | | | | |
| コモンズ・フォーラム #2<br>「芸術と公共」<br>Commons Forum #2<br>“Arts and Public” | | | | | | 18:00-21:00 | | | | | |
| コモンズ・フォーラム #3<br>「芸術と仮想性」<br>Commons Forum #3<br>“Arts and Virtuality” | | | | | | | | | | 17:00-20:00 | |
| コモンズ・フォーラム #4<br>「芸術と政治」<br>Commons Forum #4<br>“Arts and Politics” | | | | | | | | | | | 17:00-19:30 |

# クレジット

## シアターコモンズ ’20

### シアターコモンズ実行委員会

委員長｜相馬千秋（特定非営利活動法人芸術公社 代表理事）
副委員長｜王淑芳（台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター長）
委員｜ペーター・アンダース（ゲーテ・インスティトゥート東京 所長）
委員｜サンソン・シルヴァン（在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本）
委員｜バス・ヴァルクス（オランダ王国大使館）
委員｜大舘奈津子（特定非営利活動法人芸術公社 理事）
監事｜須田洋平（弁護士）

### シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター｜相馬千秋（芸術公社）
制作・事務局統括｜清水聡美（芸術公社）
制作｜大舘奈津子、戸田史子、藤井さゆり（芸術公社）、
山里真紀子、小林麻衣子
企画アドヴァイザー｜岩城京子（芸術公社）
編集｜柴原聡子、橋場麻衣
広報アドヴァイザー｜若林直子
翻訳｜リリアン・キャンライト、水野響（Art Translators Collective）
アート・ディレクション＆デザイン｜加藤賢策（LABORATORIES）
ウェブデザイン｜加藤賢策、伊藤博紀（LABORATORIES）
制作アシスタント｜芝田遥
インターン｜牛山茉優、大川文乃、小橋清花、関あゆみ、鄭禹晨、
プルサコワありな、松本愛
経理｜松下琴美
法務アドヴァイザー｜須田洋平（弁護士／芸術公社）

### シアターコモンズ’20 技術スタッフ

舞台監督｜ラング・クレイグヒル
照明｜山下恵美（RYU. Inc）
音響｜稲荷森 健
映像｜佐藤佑樹（エディスグローヴ）
記録映像・写真｜佐藤 駿


## シアターコモンズ ’20

発行日｜2020年2月27日
執筆｜シアターコモンズ実行委員会
編集｜柴原聡子、橋場麻衣
翻訳｜リリアン・キャンライト、水野響（Art Translators Collective）
アート・ディレクション＆デザイン｜加藤賢策（LABORATORIES）
デザイン協力｜和田真季（LABORATORIES）
発行｜シアターコモンズ実行委員会
Web: http://theatercommons.tokyo
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com
Tel: 050-5358-8561（受付時間10:00-18:00）



禁無断複製・転用 © シアターコモンズ実行委員会 2020


# CREDITS

## Theater Commons Tokyo ’20

### Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson｜Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)
Vice-chairman｜WANG Shu-Fang (Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan)
Member｜Peter Anders (Director, Goethe-Institut Tokyo)
Samson Sylvain (Embassy of France in Japan / Attaché culturel, Institut français du Japon)
Bas Valckx (Embassy of the Kingdom of the Netherlands)
Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)
Auditor｜Yohei Suda (Lawyer)

### Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director｜Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)
Production Manager and Coordinator｜Satomi Shimizu (Arts Commons Tokyo)
Project Coordinator｜Natsuko Odate, Fumiko Toda, Sayuri Fujii (Arts Commons Tokyo), Makiko Yamazato, Maiko Kobayashi
Project Advisor｜Kyoko Iwaki (Arts Commons Tokyo)
Editor｜Satoko Shibahara, Mai Hashiba
PR Advisor｜Naoko Wakabayashi
Translation｜Lillian Canright, Hibiki Mizuno (Art Translators Collective)
Art Direction / Design｜Kensaku Kato (LABORATORIES)
Web Design｜Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)
Assistant Project Coordinator｜Haruka Shibata
Intern｜Mayu Ushiyama, Ayano Okawa, Kiyoka Kobashi, Ayumi Seki, Ushin Tei, Alena Prusakova, Ai Matsumoto
Accountant｜Kotomi Matsushita
Legal Adviser｜Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)

### Theater Commons Tokyo ’20 Technical Staff

Stage Manager｜Lang Craighill
Lighting｜Megumi Yamashita (RYU.Inc)
Sound｜Takeshi Inarimori
Movie｜Yuki Sato (Edith Grove)
Documentation Video and Photography｜Shun Sato


## Theater Commons Tokyo ’20

Date of Issue｜February 27th, 2020
Editor｜Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation｜Lillian Canright, Hibiki Mizuno (Art Translators Collective)
Art Direction / Design｜Kensaku Kato (LABORATORIES)
Design Assistant｜Maki Wada (LABORATORIES)
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee
Web: http://theatercommons.tokyo
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com



© Theater Commons Tokyo Executive Committee 2020. All rights reserved.